

2021年度 事業報告

I. 事業の経過及びその成果

1. 社員総会

第74回定時社員総会を2021年5月26日に化学会館5階会議室で開催。社員総数198名のうち174名（電磁的方法による議決権行使社員数97名、有効委任状77名）が出席して会が成立。2020年度決算（貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録）承認、理事・監事選任に関して決議した。また、2020年度事業報告、2020年度名誉会員推戴について報告が行われた。

2. 役員会等

1) 理事会

本年度は、第654回（5月10日）、第655回（5月26日）、第656回（7月12日）、第657回（10月28日）、第658回（2022年2月7日）の計5回開催するとともに、メール審議によるみなし理事会を1回行った。

① 代表理事及び業務執行理事の選任

第74回定時社員総会後の第655回理事会で、代表理事・常務理事として、澤本光男氏、代表理事・筆頭副会長として三浦雅博氏を選出した。なお、代表理事・会長の小林喜光氏は留任である。また、業務執行理事・副会長としては、留任である織田佳明氏、渡利広司氏に加え、新たに梅谷博之氏、塩野毅氏、塩谷光彦氏を選出した。

② 公益法人として内閣府へ定期提出書類の提出

2020年度事業報告、2020年度決算に係る資料について、第654回理事会で承認し、第74回定時社員総会でそれぞれ報告・決議後、5月末に内閣府へ提出した。また2021年度理事について、第653回理事会で承認、第74回定時社員総会で決議後、第655回理事会で代表理事、業務執行理事の選任を行って、内閣府へ役員の変更届を提出した。

2022年度事業計画及び予算について第658回理事会で承認し、2月末に内閣府へ提出した。

③ 2022年度事業計画、予算

2022年度予算については、第656回理事会において承認された「2022年度予算作成方針」に基づき、部門長、委員長、支部長、部会長宛に策定を依頼し、第1次案を策定した。

その後、財務担当理事打合せ会（計2回）を経て、第658回理事会にて最終承認された。2022年度予算は、新型コロナウイルスによる影響等もあり、会費収益の減少に歯止めがかからず、2021年度予算と比較して会費収益8,871千円減、論文事業収益15,466千円減となった。費用では業務委託費30,178千円増、旅費交通費4,351千円増があり、全体で32,484千円の赤字となった（対前年度予算326千円の悪化）。

2022年度事業計画については、第658回理事会にて承認された。

④ 2022年度基本活動方針の承認

中長期基本戦略（2020～2025年度）では情報発信、異分野・国際交流、産官学連携、人材育成・多様化、組織活性化の5項目を強化すべき項目として、外部環境、内部環境を考慮して解決のアプローチを明示しており、この5項目に関する2022年度基本活動方針を第658回理事会で承認した。

⑤ 2022・2023年度会長最終候補者及び役員候補者

2022・2023年度会長最終候補者及び理事候補者、監事候補者については、役員候補者選考委

員会（2022年1月13日）を経て、第658回理事会で承認された。2022・2023年度役員候補者については、第75回定時社員総会（2022年5月25日）に諮ることになった。

⑥ 重要な使用人としての支部長、部会長、事務局長の選任

第658回理事会において、2022年度の支部長として、大熊毅氏、美齊津文典氏、大塚英幸氏、海老原昌弘氏、跡見晴幸氏、大下浄治氏、島ノ江憲剛氏を選任した。また、部会長として、出口茂氏、吉澤一成氏、竹山春子氏、浅沼浩之氏、吉岡直樹氏を選任した。さらに事務局長として、鈴木慎一氏を選任した。

⑦ 各賞選考、フェロー選考、化学遺産認定

2021年度フェロー候補者については、規則に従って選考し、第657回理事会で承認した。2021年度の各賞候補者（長倉三郎賞を除く）、化学遺産認定候補、吉野彰研究助成対象候補者については、2021年度第1回みなし理事会で承認した。

⑧ 長倉三郎賞選考

2021年度第1回長倉三郎賞の受賞について、第658回理事会で承認した。

⑨ 規程類の制定・改定

「著作権規程」の新設、「テレワーク就業規則」の新設及び「事務局職員就業規則」、事務局職員給与規則」等の規則類の改訂を第656回理事会で承認した。決裁規程の改定を第657回理事会で承認した。「ハラスメントの防止に関する規則」の新設及び「出産・育児・介護休業等に関する規則」の改定を第658回理事会で承認した。

⑩ 国際交流関係

アジア国際シンポジウム Lectureship Award の受賞候補者7名、Nakanishi Prize の受賞候補者1名について第657回理事会で承認した。第16回 PCCP Prize 受賞候補者3名を第658回理事会で承認した。

⑪ 高等学校化学教育カリキュラムに関する提言

日本の高校生に必要な化学リテラシーに関し、制約のない理想的教育課程の提案内容について、第656回理事会で承認した。

2) 顧問会

本年度は、8名の顧問（歴代会長）出席のもと開催（10月28日）した。顧問各位から貴重なご意見を伺った。

3) 相談役会

本年度は、相談役会は開催しなかったが、化学企業トップとの意見交換の場を積極的に活用していく。

4) 支部長・部会長会

本年度は、3回開催（3月23日、7月12日、2022年2月7日）した。

支部・部会に関しては、基本活動方針、予算編成方針、事業計画、長倉三郎賞設立、会員状況と会員増強取組、著作権規程の新設、CSJ 化学フェスタ、教育・普及活動（国際化学オリンピックへの生徒派遣、夢・化学-21、化学の日・化学週間）、Pacifichem2021、ジャーナル戦略、等についての情報共有と協力の要請を行った。

3. 運営会議関係

1) 運営会議

本年度は、計5回開催（4月19日、6月18日、9月27日、12月8日、12月24日）した。主に理事会における審議案件について予備的検討を行うとともに、会の重要事項について審議を行った。その他、各委員会委員長、ディビジョン主査の選任を行った。また、新設された長倉三郎賞の受賞候補者選考のため、臨時運営会議（12月24日）を開催し審議を行った。

2) 戦略企画委員会

本年度は計4回開催（4月19日、6月18日、9月27日、12月8日）した。毎回原則1件の重要事項に関し、集中的に審議する場とし、以下のテーマについて討議を行った。

① カーボンニュートラルへの取組

イベント、講演会及び機関誌といった既存事業において、カーボンニュートラルを取り上げた企画を実施するとともに、6つの化学系学協会と共同で「2050年カーボンニュートラルの実現」パネルディスカッションを「化学の日」に実施した。

② 化学系学協会との協調

化学系学協会会長との情報交換、国内・海外の化学系学協会の収益構造について共有を行った。その後、他学協会と、共通の課題に対して連携を進めること、連携してシンポジウムを企画すること、年会の共催等について自由討議を行った。

③ 化学会の経営戦略に関して（財務改善、会員増強）

現状の共有として新型コロナウイルスの影響により各種イベント開催が制限された一方で旅費交通費等の費用削減になったこと、会館改修による賃貸事業収益は増収となったこと、会員数の減少に伴って会費が減少し、ジャーナル購読費や年会参加費も減少している等について説明があった。その後、会員数の維持、資金運用、シニア人材の活用、年会、ジャーナル、若手人材の育成等の今後の取組について自由討議を行った。

④ ジャーナル戦略、出版事業について

科研費「国際情報発信強化」の支援を得て行っているジャーナルの取組内容とその効果を報告し、今後のジャーナル戦略を議論した。次期科研費の取得、そして、さらなる情報発信強化（読者獲得）と収支改善のため、海外出版社との協業を検討することとなった。

⑤ 2021年度決算予想、2022年度予算案について

2022年度予算策定に関して、財務担当理事打合せ会での検討を経て、2次案の策定を依頼しているとの報告の後、具体的な改善策について説明及び議論を行った。また、2021年度決算予想については、新型コロナウイルスの影響によりイベント関連の収益は減少し、業務委託費は増加するため、収支は赤字の見込みである旨、報告があり、赤字分の充当について検討を進めることになった。

3) 広報委員会

広報委員会では日本化学会の情報発信力を強化する取組を進めている。本年度は日本化学会の活動について、アニュアルレポート2021発行、記者会見実施（1回）、ニュースリリース配布（15件）、本会ウェブサイトへの新着情報アップ（102件）を行った。

また、多くの方に「化学の日」に参加いただくことを目的に、2021年版「化学の日」缶バッジデザインコンテストを実施し、491名の応募（内訳：小学生の部25点、中学生の部80点、高校生の部194点、一般の部192点）の中から最優秀賞1点を缶バッジデザインとして採用した。「化学の日」缶バッジの他にも周期表クリアファイルを作成し、各地で実施される化学普及活動時のグッズとして配布した。

4) 倫理委員会

本年度は「日本化学会会員行動規範」及び「行動の指針」に関わる問題が特になく、倫理委

員会は開催しなかった。

5) 論説委員会

論説委員会は日本化学会が専門家集団として、社会に向けてより積極的に発言するため、化学、化学技術関連の時事テーマを随時とりあげ、それに対する見解を機関誌「化学と工業」及び本会ウェブサイト「論説」として掲載し、会員及び一般に発信している。

本年度は論説委員会を2回開催し、執筆を依頼するテーマについて論議し、論説委員及びゲスト論説委員に順次執筆を依頼、掲載した。

6) 化学オリンピック支援委員会

化学オリンピック日本委員会の目的を継承し、化学に対する社会的関心を高めるとともに、化学分野の次世代人材の拡充と育成に寄与するために、国際化学オリンピック大会に関する国内及び国際的活動を支援する。本年度は、国際化学オリンピック大会の日本代表候補者に対する訓練支援、日本代表の選抜・訓練に対する支援などを行った。

4. 会務部門

1) 会務部門会議

会務部門では、学会運営に係る規程・規則の整備、役員候補者の推薦、会員増強、表彰者選考に関する業務を遂行することで、会員の増加推進や内部統制の充実に努めた。事務局就業規則等の規則類の改訂を承認し第656、657、658回理事会に提案した。

また、2021年度フェローとして小林長夫氏、歌川晶子氏を選考し、理事会への提案を行った。会員システムサーバーの更新に当たり、外部レンタルサーバーへの移行を検討し移行先を選定した。

2) 会員委員会

本年度は委員会を3回開催した。化学会の会員数は依然として減少が続いており、会員増強のための方策や会員メリットについて、種々議論した。本年度は、会員証のデジタル化など会員の利便性が向上するような取組をした。法人正会員の退会・減口申請会員の慰留については、会長から企業トップ宛てのレター送付に一定の効果が見られた。

3) 役員候補者選考委員会

役員候補者選考委員会（2022年1月13日）において、2022・2023年度新任理事候補者13名と新任監事候補者2名を選出し、理事会に答申した。

4) 各賞選考委員会

各賞選考委員会において、2021年度受賞候補者を選出し、理事会に答申し、承認された。表彰式は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から挙行を中止し、表彰楯の送付と会誌への記事の掲載をもって、表彰とした。

【日本化学会賞】6件

有賀克彦 (NIMS)	龔劍萍 (北大院先端生命)	関隆広 (名大院工)
時任宣博 (京大化研)	古田弘幸 (九大院工)	宮坂博 (阪大院基礎工)

【学術賞】10件

岩本武明 (東北大院理)	大塚英幸 (東工大物質理工院)	岡本敏宏 (東大院新領域)
神川憲 (阪府大院理)	山東信介 (東大院工)	Citterio Daniel (慶大院理工)
根岸雄一 (東理大理)	前田理 (北大院理)	矢貝史樹 (千葉大院工)
山口和也 (東大院工)		

【進歩賞】9件

石垣侑祐（北大院理） 石割文崇（阪大院工） 稲葉央（鳥取大院工）
神戸徹也（東工大 IIR） 草田康平（京大白眉セ） 高野慎二郎（東大院理）
生井飛鳥（東大院理） 松野太輔（東大院理） 吉野達彦（北大院薬）

【女性化学者奨励賞】 2件

鎌田瑠泉（北大院理） KIM Yuna（北大電子研）

【化学技術賞】 2件

- ・井上修一（大阪ガスマーケティング）、中尾孝之（大阪ガス）、齋藤禎（大阪ガスマーケティング）、西村茂文（シミズ）、藤本哲朗（京セラ）
- ・小林定之、松本英樹、松岡英夫、熊澤貞紀、落合伸一郎（東レ）

【技術進歩賞】 1件

小藤勇介（東芝）

【化学教育賞】 2件

三好徳和（徳島大院創成科学） 村田静昭（名大）

【化学教育有功賞】 3件

篁耕司（旭川高専） 松岡雅忠（福岡大理） 山本喜一（芝浦工大柏中高）

【化学技術有功賞】 1件

豊田朋範（分子研）

【功劳賞】 2件

岡崎廉治（元東大院理） 務台潔（元東大院総合文化）

5) 長倉三郎賞

「長倉三郎賞選考規則」に従って、日本化学会各賞（日本化学会賞を除く）の受賞内定者について各賞選考委員会で第一次候補者を選考し、臨時運営会議にて審査の上、最終候補者として、前田理氏を選出し、第 658 回理事会に答申し、承認された。

5. 研究交流部門

1) 研究交流部門会議

本年度は部門会議の開催は無し。

2) 学術研究活性化委員会

本年度は委員会を 1 回開催し、以下の検討を行った。

① 第二次先端ウォッチング調査

『第二次先端ウォッチング調査』は、複数の化学関連領域にインパクトを与え、新領域への発展が期待されるテーマについて調査を行っている。今年度の実施はなし。

② 中長期テーマシンポジウム

現在の中長期テーマ 6 件とシンポジウム実施状況を確認した。本年度は 6 テーマで中長期テーマシンポジウムを第 102 春季年会にて実施することにした。実施予定の 6 テーマは次の通り、1. 分子から創る Spin Qubits の最前線、2. 高密度共役物質の未来～新しい電子共役から生み出される機能～、3. 生物現象鍵物質の研究展開、4. 人工光合成技術の社会実装に向けた課題そして展望、5. 革新的触媒：未来へ、6. 次世代分子システム化学のフロンティア協奏的機能の創出と計測—

③ アジア国際シンポジウム

春季年会の活性化・国際化を目的として、アジア地域の若手研究者を招聘して国際シンポジウムを開催しており、第 101 春季年会では 4 ディビジョン（①物理化学②光化学③理論化学・情報化学・計算化学④電気化学）による 3 つのシンポジウムを開催した。第 102 春季年会では 6 ディ

ビジョンによる5つのシンポジウムの開催を予定している。

3) ディビジョン運営委員会

本年度は委員会を2回開催し、第102春季年会でのアジア国際シンポジウム開催ディビジョン等について検討した。また、各ディビジョンの活動状況について確認した。現在約17,900名の会員が21ディビジョンに登録している。

4) 春季年会実行委員会

① 第101春季年会 (2021)

新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑みオンライン形式で実施した。会期は3月19日～22日。

② 第102春季年会 (2022)

関西学院大学での現地開催を目指していたが、新型コロナウイルス感染拡大状況に鑑み、完全オンライン開催での実施の予定。会期は2022年3月23日～26日。

5) 研究会・新領域研究グループ

① 研究会

「フロンティア生命化学」、「低次元系光機能材料」、「分子アーキテクトニクス」の3つの研究会が各種活動を実施した。

② 新領域研究グループ

「金属と分子集合」、「ナノスケール分子デバイス」、「分子統計化学」の開拓～溶液とソフトマテリアルとの橋渡し、「精密物質変換のための分子空間化学」、「サステイナブル・機能レドックス化学」、「液相高エネルギー化学の新展開」、「分散凝集の学理構築への科学と技術戦略」の7つのグループが各種活動を実施した。

6) 国際交流委員会

① 環太平洋国際化学会議 (Pacifichem)

新型コロナウイルスの影響で1年延期されたPacifichemは、日本時間の12月17～22日の6日間に、今回初めてVirtual形式で開催した。今回で通算8回目の開催で、シンポジウム数399、全セッション数1,142、講演数9,295件(口頭講演6,877、ポスター講演2,418件)、また参加登録数は8,720名(内学生は2,626名)、世界71の国・地域からご参加頂いた。

今回は世界各国の講演者、聴講者を想定し、どのタイムゾーンであっても参加可能なようにセッション開催時間を大きく3つに分類するなどの配慮を行うとともに、当日のライブセッションを聞き逃した方のために、会期終了後1月末まで、オンデマンドで講演動画を視聴可能なよう講演者にアーカイブ配信用データをアップロード頂くなどの取組みを行った。次回は2025年に従来通りホノルルでの開催を予定。

② Nakanishi Prize 並びに Nakanishi Symposium

Nakanishi Prizeは、日本化学会と米国化学会(ACS)が合同で受賞者選考と顕彰を行う国際賞であり、生物活性天然物の単離、構造解析、生物機能、生合成及び全合成分野での顕著な研究業績を対象に選考される。本年度は本会のナカニシプライズ選考委員会によって、楠見武徳氏(徳島大学名誉教授)に授与することを決定し、第102春季年会で受賞講演を含んだ中西シンポジウムを開催予定。なお次回はACSが受賞者選考を行う。

③ 日英シンポジウム

2010年7月に締結された『日英国際協力協定』は本来2020年に更新予定であったが、新型コロナウイルスの影響により署名調印は保留となっているものの実質的な相互の協調関係維持については双方合意の上、下記項目⑤で言及のCS3や項目⑧のPCCP Prize 顕彰などを通じ英国王立化学会(RSC)と共同で化学振興に寄与する試みを積極的に行っている。目下、日英シンポジウムの次回開催は未定だが数年内に開催するべくRSCと密接に連絡・調整を行っている。

④ 日台シンポジウム

国際活動の一環として、2018年に台湾化学会 (Chemical Society Located in Taipei; CSLT) と二学会間の交流覚書 (MOU) を締結し、毎年交互に若手研究者を招聘して日台シンポジウムを開催。次世代を担う若手化学者による国際交流活性化と、トップレベルの化学者が深い議論を行うことを目的とし、次回第3回目を2022年3月12日にCSLT National Meetingで「Sustainable chemistry for the future」をテーマに開催することとなっている。

⑤ CS3 (Chemical Science and Societies Summit)

独、英、中、米、日の化学会及びFunding Agencyが連携して、喫緊のテーマに絞り、世界の第一線の化学者を集め会合を行なう。2009年第1回ドイツでの開催以降、毎年いずれかの参加国がホストとなり開催していたが、2015年以降は隔年開催で第8回目を2019年11月11～13日にRSCが主催でテーマを「Science to Enable Sustainable Plastics」(参加国：独、英、中、日)として開催した。次回開催は日本が主催国となる順番であるが、新型コロナウイルスの影響で先の見通しがつきにくい状況であることから、2022年の開催を目指すこととして現在、日本の研究助成団体であるJSTとともに検討を進めている。

⑥ FACS (アジア化学会連合) 関係

FACSは太平洋・アジア地域に根付いた化学コミュニティとして1978年に設立され本会は1981年に加盟、現在の加盟国・地域は31にのぼる。EXCO(役員会)が年2回開催され、また奇数年にはACC(アジア化学会議)が開催される。次回19ACCは2021年9月にトルコ・イスタンブールにて開催予定であったが新型コロナウイルスの影響で開催が見送られた。次回は未定。

⑦ IUPAC (国際純正・応用化学連合) 関係

IUPAC General Assemblyで2018年に可決されたCompany Associate(賛助会員)の会費の漸次大幅増額(\$50→\$1,500)が2021年に完了し、この期間中に賛助会員数が19から12に減少した。企業の法人会員で構成されるIUPAC賛助会員委員会は、Committee on Chemistry and Industry(COCI)にTitular Member(TM; 専門委員)を派遣しており、2022年からはIUPAC賛助会員委員会委員長を新任する山根常幸氏(東レリサーチセンター)に交代する。なおIUPACは奇数年に総会(General Assembly)と世界化学会議(World Chemical Congress)を開催しており、2021年は8月にカナダをホストとしてオンラインで開催された。次回は2023年にオランダがホストとして開催予定。

⑧ PCCP Prize

RSCとの協力協定に基づき毎年数名の受賞候補者を選定しRSCと合同で表彰を行っている。本年も21ディビジョンに候補者推薦を依頼し今回は17件の選考書類を受領した。1月末に開催された選考委員会での検討を経て、今年の受賞者3名を決定し本会ウェブサイト、化工誌などで受賞者公表を行った。

◆唐島秀太郎氏(京大院理)[物理化学ディビジョン推薦]

◆北尾岳史氏(東大院工/JST さきがけ(兼担))[無機化学ディビジョン推薦]

◆安川知宏氏(東大院理)[触媒化学ディビジョン推薦]

⑨ 命名法専門委員会

本年度は1回委員会を開催。『有機化学命名法—IUPAC2013 勧告及び優先 IUPAC 名一』の正誤表作成について対応を行った。

⑩ 原子量専門委員会

2021年版の「原子量表」を2021年化工誌・化教誌4月号に掲載した。また、2022年度版の「原子量表」を作成した。2022年版から化工誌・化教誌への掲載を休止し、本会ウェブサイトへの掲載を行うこととした。

⑪ 単位・記号専門委員会

「化学で使われる量・単位・記号」2021年版を2021年化工誌・化教誌4月号に掲載した。また、2022年版の更新を行った。2022年版から化工誌・化教誌への掲載を休止し、本会ウェブサイトへの掲載を行うこととした。

7) 化学遺産委員会

① 化学語り部・オーラルヒストリー事業

化学・化学技術の分野で大きな業績を残された諸先達にインタビューを行い、それを映像と音声及び冊子体で後世に残すことを目的としている。本年度は継続制作となっていた園田昇氏の冊子体を発行した。

② 化学・化学技術史に関する一般市民への啓発事業

第15回化学遺産市民公開講座は2021年度に準備し、2022年3月19日にオンラインにて実施予定。約150名が事前申し込みを行っている。

③ 「化学遺産認定制度」の実施

第13回化学遺産として以下の3件を認定し、認定証を贈呈する予定。

- 認定化学遺産 第058号 日本の放射化学の先駆者 飯盛里安のIM泉効計
- 認定化学遺産 第059号 日本の科学技術文献抄録誌の先駆け：『日本化学総覧』
- 認定化学遺産 第060号 日本の合成香料工業創成期の資料

8) 男女共同参画推進委員会

女性化学者奨励賞の候補者の選出を行った。第22回男女共同参画シンポジウム“ーホントはどんな職場環境 ～性別の異なる上司と部下～”を企画し、第102春季年会で開催予定。男女共同参画学協会連絡会に委員を派遣して活動を行った。

9) 環境・安全推進委員会

傘下に安全小委員会及び環境小委員会を設置し、「化学安全スクーリング」及び「環境教育講演会」を実施した。また、日本学術会議主催の「安全工学シンポジウム」、「環境工学連合講演会」に対し、共催学会としての窓口として協力した。

6. 学術情報部門

1) 学術情報部門会議

本年度は学術情報部門会議の開催は無し。

2) 化工誌編集委員会

例年通り2回開催し、企画のアイデアや編集方針の打合せを行った。

① 化工誌編集幹事会

委員会開催回数：幹事会6回。

発行状況：総頁数 971 頁、総発行部数：259,200 部

・「化学と工業」誌の内容の充実を図るため、各号の企画案及びライター記事について討議した。また、新型コロナウイルスの影響で多くの会員の在宅勤務が続いている状況を考慮し、オンラインでの無料公開を継続している。

② 広告小委員会

本年度は広告小委員会の開催は無し。

3) 欧文誌編集委員会

委員会開催回数：本委員会 1 回、幹事会 3 回

発行状況：論文掲載 191 件、総頁数 2,630 頁、オンラインジャーナル

・北川進氏を Guest Editor に迎え、「Masterpiece Materials with Functional Excellence」を

テーマとしたウェブ特集を実施している。

- 論文を公開するだけでなく、関連分野の研究者にメールで送付をし、Twitterにて広く論文PRを行った。

- 国際会議や討論会において広告掲載やフライヤー配布を行い、PRを行っている。ジャーナル賞 (BCSJ Award) の提供も行っており、特に若手研究者のエンカレッジをしている。

- Impact Factor (IF)は、5.488となった。

4) 速報誌編集委員会

委員会開催回数：本委員会 1回、幹事会 4回

発行状況：論文掲載 403件、総頁数 1,851頁、オンラインジャーナル

- 2021年にChemistry Lettersは50周年を迎え、新進気鋭の若手を中心に82件のHighlight Reviewを掲載した。

- 国際会議や討論会において広告掲載やフライヤー配布を行い、PRを行っている。若手研究者に対してジャーナル賞 (Chemistry Letters Young Researcher Award) の提供も行っており、若手研究者のエンカレッジをしている。

- Highlight Reviewだけを集めた小冊子「Highlight Review Collection」をPDFにて作成をして、広く配布した。

7. 産学連携部門

1) 産学連携部門会議

本年度は産学連携部門会議の開催なし。

2) 産学交流委員会 (委員会開催回数3回)

産学交流委員会では、傘下に4小委員会を設置して産学連携事業を企画・実行するとともに、理事会及び運営会議からの付託事項(次年度の産業界選出役員候補者の推薦、化学技術賞等の受賞候補者推薦など)への対応を行った。

① CIP企画小委員会 (委員会開催回数4回)

春季年会における産官学の学術交流及び連携強化のための事業の企画・実施、及び優秀講演賞(産業)の審査・選考を任務とする小委員会である。この小委員会から春季年会実行委員会傘下のCIP小委員会に委員を派遣する形をとって、春季年会でのシンポジウムであるイノベーション共創プログラム(CIP)での企画・実施を担っている。第102春季年会では、12のセッションとCIPポスターを実施予定である。CIPポスターは申込み59件のうち審査申請された48件から優秀講演賞(産業)の審査・選考を行う。

② 教育企画小委員会 (委員会開催回数1回)

産業界所属の研究者・技術者、及び産業界を目指す学生の教育に関わる事業の企画・実施を役割とする委員会で、基礎技術力の向上を目的とする「化学技術基礎講座」を企画・実施している。昨年度に引き続き、オンライン(Zoomを使用したライブ配信及び講義動画のオンデマンド配信の併用)で全5講座を開講した。次年度についても、継続してオンラインで開催予定である。

開催日	講座名	主査	参加者
9/16-17	電子部品・材料の物性化学 ー最先端産業を支える電子・光学材料開発に必須の基礎をマスターしようー	藤岡洋 (東京大学)	21名
10/11-12	製品開発に必要な有機合成化学の基礎	秋山隆彦 (学習院大学)	26名
11/15-16	知っておきたい化学プラントの基本原則、工業化プ	霜垣幸浩	35名

	ロセスの要諦を学ぶー化学技術者のための化学工学ー	(東京大学)	
11/25, 29	高分子化学ー高分子の基礎から応用・加工までー	西野孝 (神戸大学)	32名
1/20-21	高分子キャラクタリゼーション講座ー複雑な構造もやり方一つでここまで分かる！入門から応用まで徹底講義ー	田代孝二 (豊田工業大学)	28名

③ 懇話会企画小委員会（委員会開催回数2回）

産学官の学術交流の場としてのR&D懇話会（法人会員29社、個人会員20名、本年度末時点）の企画・実施を任務とする。会員の研究会・勉強会として、トピックステーマでの講演と交流会から成る「R&D懇話会定例会」を6回、最先端技術を半日で紹介する「技術開発フォーラム」を1回、オンラインにて開催した。

開催日	講座名	参加者
4/20	カーボンニュートラル（1）二酸化炭素利用の現状と今後	92名
5/18	カーボンニュートラル（2）鉄鋼関連分野における二酸化炭素削減の取り組み	64名
6/21	カーボンニュートラル（3）科学技術の未来を読む～「二酸化炭素利用技術CCUS」および「化学」の現状と将来は？～	66名
10/1	カーボンニュートラル（4）人工光合成	48名
11/2	第15回 技術開発フォーラム『全固体電池の最新動向』	64名
12/13	感性を生かした素材・製品開発	33名
1/28	ニューモダリティ医療：新技術・新展開	20名

④ 人材交流小委員会（委員会開催回数2回）

産学の人材交流に関わる事業の企画・実施を担当する。5月と7月に「大学生・大学院生向けの企業研究者とのオンライン座談会」を開催し、合計19名の学生が参加した。また、9月に学生会員向けの「企業現場見学」を花王(株)と(株)ダイセルに協力頂きオンラインで開催し、合計46名の学生が参加した。12月に大学の教員と企業の人事の交流を目的とした「就職交流会」をオンラインで開催し、22大学、25企業から約80名の参加があった。また外部組織による化学技術者教育など人材教育に関わる活動へ協力した（JABEEへの委員派遣）。来年度については、引き続き既存イベントの「オンライン座談会」、「就職交流会」をオンラインで、「企業現場見学会」をオンラインもしくは現地で開催するとともに、新規事業として「博士課程学生向けのキャリア座談会」をオンラインで開催予定。

⑤ 協力委員制度

本会から配信する産学連携関連情報の社内周知を任務とする協力委員は、法人会員230社（本年度末時点）から推薦をいただいている。残りの法人会員（約200社）に対する推薦要請を継続していく必要がある。

3) 化学フェスタ実行委員会（委員会開催回数5回）

CSJ化学フェスタは「産学官の交流深耕」と「化学の社会への発信」を趣旨として開催している。第11回CSJ化学フェスタは10月19日～21日の3日間、タワーホール船堀を運営本部としてオンラインにて開催し、3,541名が参加した。全国から954名からの応募があった「学生ポスター」や新企画を含む喫緊の技術課題について講演、論議する「テーマ企画」をはじめ、産学官

の団体・機関が企画する「コラボレーション企画」、「産学官 R&D 紹介企画」など多彩なプログラムが行われ、現地開催と変わらぬ産学官の交流を促進することができた。第 12 回 CSJ 化学フェスタは 2022 年 10 月 18 日～20 日にタワーホール船堀での現地開催を予定しており、産学官から約 80 名の実行委員会を編成、企画等の準備を進めている。

4) 吉野彰研究助成委員会（委員会開催回数 2 回）

2014 年度に発足した本委員会では、毎年異なるテーマを設定して公募を実施している。2021 年度の研究テーマは『アンモニアを水素源とした炭酸ガスの還元反応によるメタン製造技術』と決定し、公募を行った結果、4 件の応募を得た。候補者 4 名について「吉野彰研究助成選考小委員会」による厳正な選考・審査と「吉野彰研究助成委員会」での審議を経て、2021 年度の吉野彰研究助成金の交付対象者は佐藤勝俊氏（名古屋大学）とすることを、理事会において承認、決定した。選考結果は「化学と工業」3 月号並びに本会ウェブサイトに掲載。

8. 教育・普及部門

教育・普及部門は学校教育の充実、化学の普及、会誌「化学と教育」の一層の充実を活動の 3 本柱として、学校教育委員会、普及・交流委員会、化教誌編集委員会、化学グランプリ・オリンピック委員会の 4 委員会で構成されている。また日本化学会、化学工学会、日本化学工業協会、新化学技術推進協会と共同で 10 月 23 日を「化学の日」、10 月 23 日を含む一週間を「化学週間」と制定、化学の理解増進を図る活動に取り組んでいる。

2017 年度に地域における継続的な化学普及活動への取組みにおいて功績が認められる個人を表彰する「化学普及活動功労者表彰」を制定した。本年度は、各支部、教育・普及部門から推薦のあった 15 名を選定した。

1) 学校教育委員会

大学入試問題検討小委員会、グリーン化学実験小委員会、化学用語検討小委員会、化学教育カリキュラム構築小委員会の 4 委員会で構成されている。

① 大学入試問題検討小委員会

大学入試センターからの依頼により、大学入学共通テスト（化学）の検討・評価を行うことを目的としている。

② グリーン化学実験小委員会

環境にやさしく、すぐれた新しい実験の開発・普及を図ることを目的としている。マイクロスケール実験キットを用いて小学生向け及び教員向けの化学実験教室を開催し、普及活動に取り組んだ。

③ 化学用語検討小委員会

化学用語検討小委員会では高等学校教育現場で問題となっている用語について教科書会社の協力を得ながら抽出し、望ましい用語、使い方について提言することを目的としている。

④ 化学教育カリキュラム構築小委員会

大学教育に繋がる、国際的水準の高等学校カリキュラム案を作成することを目的としている。

2) 普及・交流委員会

化学教育フォーラム企画小委員会、国際関係小委員会、化学だいすきクラブ小委員会、実験体験小委員会、クイズショー小委員会の 5 委員会で構成され、化学の普及活動を進めている。この他「化学の日・化学週間」など化学の理解を目的にさまざまな社会と連携し、積極的な活動に取り組んでいる。

① 化学教育フォーラム企画小委員会

春季年会で化学教育に関するシンポジウムを開催している。2022 年度には第 102 春季年会

(2022)の併催シンポジウムとして第28回化学教育フォーラムで「新しい高等学校学習指導要領と化学教育」を開催予定。

② 国際関係小委員会

ICCE2022(2022年7月18日～22日・ケープタウン)が予定されている。

③ 化学だいすきクラブ小委員会

化学だいすきクラブ小委員会では小学生・中学生をメンバーとする「化学だいすきクラブ」(会員約2,700名)向けに、「ニュースレター」を年3回編集・発行した。また化学の理解増進、化学だいすきクラブ会員及び読者層を広げるため、夏のイベントを開催しているが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の面から体験型イベントは実施しなかった。

④ 実験体験小委員会

保育育園や小学校、科学館、公民館、博物館などで出前実験教室を実施することを目的としている。

⑤ クイズショー小委員会

はまぎんこども宇宙科学館において「なぜナニ化学クイズショー」を開催した。

⑥ その他の普及活動：「化学の日」、「化学週間」

本年度は、「君たちの将来と化学の未来－東大で過ごす化学な週末」(10月30日)等、各機関と連携して活動を行った。また、多くの一般の方に「化学の日」に参加していただくことを目的に、2021年版「化学の日缶バッジデザイン」の募集を実施した。最優秀賞を缶バッジデザインとして採用し、「化学の日」、「化学週間」関連イベント等で配布した。

3) 化教誌編集委員会

編集幹事会、新・講座小委員会、実験の広場小委員会、投稿小委員会、支部企画小委員会を適時開催し、「化学と教育」誌を年間12号編集・刊行している。化学の最新のトピックスを分かりやすく解説した記事を掲載している。また、教育の現場で必要とされる情報の特集も行い、化学教育の発展に寄与できるように努めている。

4) 化学グランプリ・オリンピック委員会

化学グランプリ2021は7月22日にオンラインによる一次選考を実施し、3,257名が参加した。一次選考のなかから成績上位者119名が10月23日のリモート監視による二次選考に進み、大賞5名、金賞18名、銀賞17名、銅賞40名が決定した。

また7月25日～8月2日にリモートで開催された第53回国際化学オリンピックにおいて日本代表生徒は銀3、銅1と全員がメダルを獲得した。今大会には世界の85カ国・地域から312名の生徒が参加した。

第54回国際化学オリンピック中国大会(2022年7月10日～19日)には、化学グランプリ2021二次選考進出者から26名を代表候補に選出しており、合宿、選抜試験を経て最終的に4名の日本代表を決定、国際化学オリンピックに派遣する予定である。

9. 支部事業

学術の振興を図る事業として、支部研究発表会、講演会などを、また、化学知識の普及と人材の育成のための事業として、環境安全講習会、中学・高校生のための化学講座、化学グランプリ、出前授業、化学クラブ研究発表会などを、7支部(北海道、東北、関東、東海、近畿、中国四国、九州)でそれぞれ実施した。

10. 部会事業

コロイドおよび界面化学部会、ケモインフォマティクス部会、生体機能関連化学部会、バイオ

テクノロジー部会、有機結晶部会の5部会それぞれにおいて、学術の振興を図る事業として、討論会、シンポジウムなどを、また、化学知識の普及と人材の育成のための事業として、ニュースレターの発行、フォーラムの開催などを行った。

11. 化学情報センター

化学会発行図書、共催・協賛の要旨集、国際会議、化学史関連資料の収集・保管を中心に、化学会編集刊行物の化学会ウェブサイトでのお知らせ、文献複写依頼対応の対応を行った。

12. 収益事業（事務室賃貸）

現在の入居状況は次表のとおり、一般社団法人情報処理学会、英国王立化学会、公益社団法人有機合成化学協会、一般社団法人触媒学会、特定非営利活動法人国際化学オリンピック日本委員会、一般社団法人日本化学連合、株式会社レプロエンタテインメントに事務室を、株式会社ファミリーマートに店舗及び事務室を貸与しており、事務室賃貸面積 1,399.01 m²が貸与されている。

階数	入居団体名	備考
7階	株式会社レプロエンタテインメント (316.2 m ²)	継続
6階	株式会社レプロエンタテインメント (348.4 m ²)	継続
4階	一般社団法人情報処理学会 (349.22 m ²)	継続
3階	公益社団法人有機合成化学協会 (64.60 m ²)	継続
3階	一般社団法人触媒学会 (50.35 m ²)	継続
3階	特定非営利活動法人国際化学オリンピック日本委員会 (34.54 m ²)	継続
3階	英国王立化学会 (65.21 m ²)	継続
3階	一般社団法人日本化学連合 (8.73 m ²)	継続
1階	株式会社ファミリーマート (161.76 m ²)	継続

II. 会員の状況

会員種別	2021年 2月末	2021年度中								2022年 2月末	年度内 増減
		入会内訳			退会内訳				変更 修正		
		新入会	復帰	入会計	退会	死亡	除籍	退会計			
個人正会員	17,128	237	6	243	1,095	101	764	1,960	1,071	16,482	-646
学生会員	4,318	2,250	3	2,253	985	1	70	1,056	-1,138	4,377	59
中高生会員	49	18	0	18	8	0	0	8	-14	45	-4
教育会員	1,558	46	2	48	105	0	78	183	81	1,504	-54
名誉会員	69	0	0	0	0	6	0	6	0	63	-6
法人正会員	422	3	0	3	14	0	0	14	0	411	-11
公共会員	356	0	0	0	58	0	0	58	0	298	-58
賛助会員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	23,900	2,554	11	2,565	2,265	108	912	3,285	0	23,180	-720
法人口数	3,417									3,365	-52

III. 役員の状況

[2021年5月26日就任時]

会 長	小林喜光	((株)三菱ケミカルホールディングス)	
筆頭副会長	三浦雅博	(大阪大学)	会務部門長, 学術情報副部門長, 広報委員長
常務理事	澤本光男	(中部大学)	国際交流委員長, 財務担当, 職員人事担当
副会長	梅谷博之	(帝人(株))	産学連携副部門長, 財務担当
	織田佳明	(住友化学(株))	産学連携部門長
理 事	塩野 毅	(広島大学)	教育・普及部門長, 職員人事担当
	塩谷光彦	(東京大学)	学術情報部門長, 研究交流副部門長
	渡利広司	(産業技術総合研究所)	研究交流部門長, 会務副部門長, 財務担当
	安中雅彦	(九州大学)	住田康隆 ((株)日本触媒)
	市川淳士	(筑波大学)	関根理香 (静岡大学)
	岡添 隆	(AGC(株))	中井浩巳 (早稲田大学)
	岡野知道	(ライオン(株))	中嶋 敦 (慶應義塾大学)
	小倉 賢	(東京大学)	早川慎二郎(広島大学)
	生越専介	(大阪大学)	林 雄二郎(東北大学)
	長田裕之	(理化学研究所)	原 亨和 (東京工業大学)
監 事	北山健司	((株)ダイセル)	福岡 淳 (北海道大学)
	君塚信夫	(九州大学)	宮崎あかね(日本女子大学)
	近藤輝幸	(京都大学)	
	北村二雄	(佐賀大学)	茶谷直人 (大阪大学)
	久新荘一郎	(群馬大学)	西本 信 (旭化成(株))

IV. 重要な契約の締結 特になし

V. 内部統制に関する事項

内部統制に関して、次の規程を整備し、法人運営を行っている。

- (1) 理事・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制に関する規程
 - ・理事の職務規程：主として代表理事及び業務執行理事の職務に関する規程
 - ・役員報酬規程：役員報酬等の支給基準に関する規程
 - ・積立資産取扱い規程：寄附金を原資として設定する積立遺産の取扱い方法の規程
- (2) 理事の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制のための規程
 - ・理事会運営規程：理事会の運営方法並びに代表理事及び業務執行理事等の職務の執行報告を理事及び監事が審議し、結果を議事録として残すこと等を定めた規程
 - ・情報公開規程：情報公開対象の資料の種類、保管及び閲覧等に関する規程
- (3) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制のための規程
 - ・リスク管理規程：リスクを防止し損失の最小化を図るためのリスク管理に関する規程
- (4) 理事の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制に関する規程
 - ・決裁規程：理事等の決裁に関する責任の範囲を明確化し、効率的な業務執行を図るための規程
 - ・事務局職制規程：事務局の組織、職位及び指揮命令系統に関する規程
- (5) 監事の監査が実効的に行われることを確保するための体制のための規程
 - ・監事の職務規程：監事の職務に関する規程

以上